

中秋のベトナム調査報告

－ 1. 獅子舞とオン・ディア

－ 2. ベトナムにおける「新」と「古」の展示 －

古谷野洋子^{※1}

サイモン・ジョン^{※2}

はじめに

2006年10月4日～9日（旧暦8月13日～18日）まで、古谷野洋子とサイモン・ジョンはベトナム中部のフエ、ホイアン、ミーソン遺跡、及び北部のハノイを訪れた。古谷野洋子の研究テーマは沖縄における「仮面神ミルク（弥勒）」の研究であり、サイモン・ジョンは「日本占領下に満州に住んでいた人々のライフヒストリー」であるが、両者は戦争遺蹟や博物館展示などにも関心をもっている。

この時期にベトナム中部を訪れた主な目的はいくつかある。まず、旧暦の8月13日～15日にベトナム一帯で行なわれるという獅子舞をみることである。ベトナムでは伝統的な祭りは旧暦に従って行われる。ベトナム中部を選んだ理由は、中部では中秋（旧暦8月15日）に確実に獅子舞が行われるという情報を得たからである。

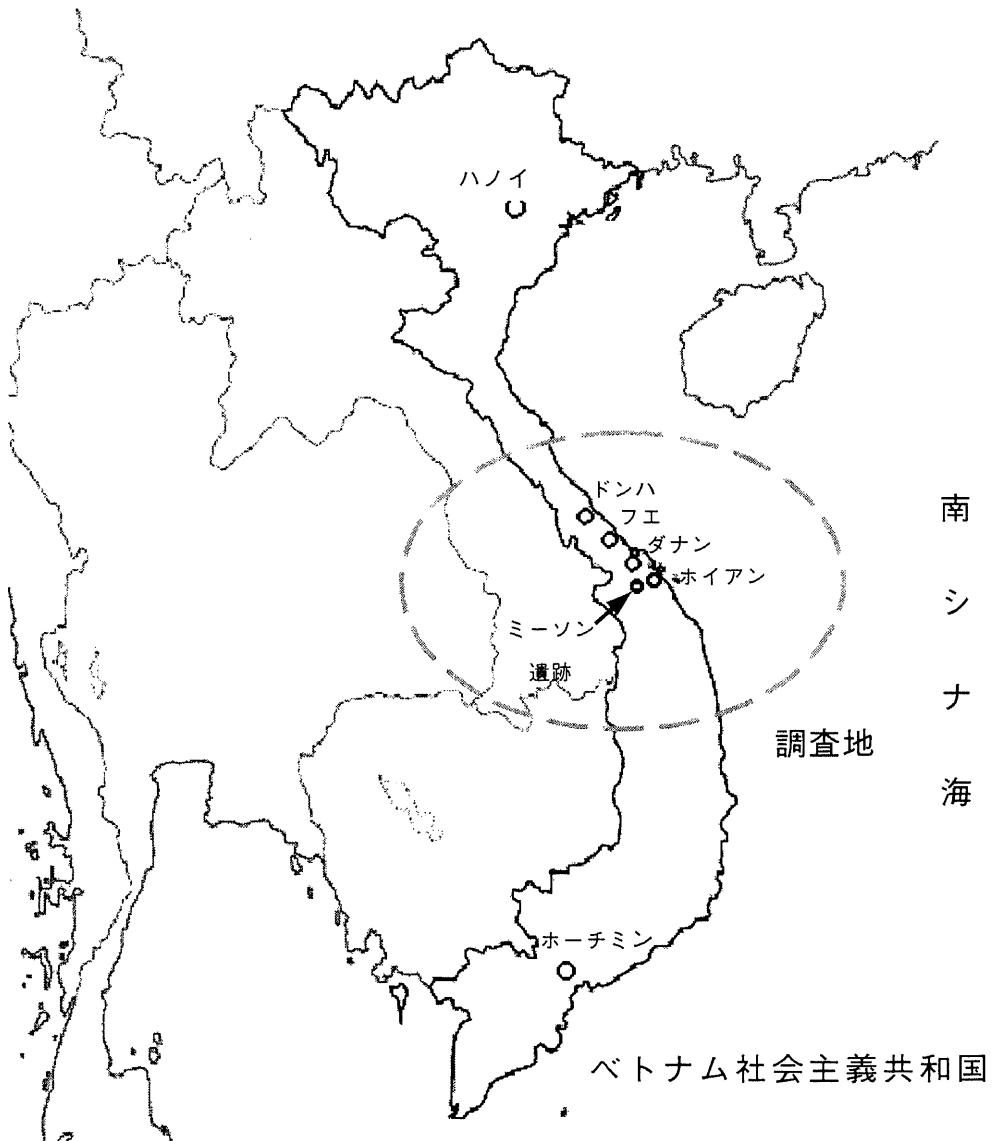
また、ベトナム中部一帯は私たちの関心をひく地域でもある。17度線近くを流れる

ベンハイ川沿いには、南北ベトナム時代、幅約10kmにわたる非武装地帯（DMZ：DEMILITARIZED ZONE）が存在し、ここはベトナム戦争における激戦地でもあった。現在、これらの戦争遺蹟の多くは保存され、ベトナム人のガイドとともに巡るDMZツアーも行われている。また、ダナンにはチャム彫刻博物館があるが、この博物館には陳列ケース等はなく、壁に彫刻がはめ込まれるなどの特異な展示方法も行われていて、博物館展示や博物館のあり方としても興味深い存在である。

本報告は、古谷野洋子とサイモン・ジョンの報告からなる二部構成をとる。「その一」は古谷野洋子による、主に獅子舞と獅子舞に現れる仮面神オン・ディアについての調査報告である。「その二」はサイモン・ジョンによる調査報告である。サイモン・ジョンは、ベトナム戦争の戦跡と、ミーソンの遺跡及び博物館における「新」と「古」の展示－に関する調査報告と考察を行う。

※1, 2 神奈川大学大学院歴史民俗資料科学研究科

ベトナム調査地マップ



その一 獅子舞とオン・ディア（報告者：
古谷野洋子）

ベトナムと中国の関係は深い。ベトナム北部は中国の王朝に支配されたこともあり、独立国となってからは冊封体制化に組み込まれた中華世界の一員でもあった。また、ベトナム南部は明代の人々が多く移民した地域である。長い歴史を通じて人々の移動と共に、中国（特に南中国）のさまざまな文化が伝わり、ベトナムの文化に大きな影響を与えた。ある意味では、ベトナムは中華世界、特に南方中華世界の周辺としてのベトナムといえる。

沖縄も琉球王朝時代、冊封体制の一員として、中国（特に南中国）のさまざまな文化を取り入れてきた。琉球もベトナムと同じように南方中華世界の周辺として捉えることが出来る¹。中国のさまざまな庶民文化の影響は今でも沖縄各地で見いだせる。しかし、このような南方中国の庶民文化の受容について記した文献はない。実際に、南方中華世界の周辺としてのベトナムと沖縄を比較検討することによって、琉球における南方中国の庶民文化の受容の一端が明らかになるのではないかと考えられる。今回の調査はこのような視点から行われた、ベトナムの獅子舞と獅子舞に現れる仮面の神についての調査である。

1. ベトナムの中秋の獅子舞

1) 中華世界における獅子舞に現れる仮面の神

宋、明、清時代にかけて元宵祭²に最も多く行なわれたのが大頭和尚と獅子舞である

といわれる〔中国民族民間舞蹈集成編集部 1992 p 262〕。明清時代の漢族風俗について記した『漢族風俗史 第四巻』『漢族風俗史 第五巻』にも、獅子と大頭和尚（あるいは和尚）の芸能は元宵祭の伝統的な民間舞蹈であったという記述がみられる³。永尾龍造は『支那民俗誌』の中で、正月から元宵祭後まで俗に大頭和尚の“をどり”と称して、大和尚の面を被った乞食が街頭を躍り歩いて銭を貰う風習があり、特に大頭和尚と柳翠という女の戯れる踊りの風習は広く行われていたと記している〔永尾 1940-1942 p320・pp.477-484〕。

しかし、大頭和尚と獅子舞は別々に現れるのではなく、共に現れることも多かったという〔顧 1996 p 262〕。実際、中国人によると、獅子舞ではしばしば獅子の相手をする人物として和尚が現れるという。獅子と和尚のヴァリエーションとして、「笑菩薩戯獅子」、「羅漢戯獅」等があり、やはり笑菩薩、羅漢公は和尚面を被り、黄色い長袍を着て蒲扇を持つ⁴。獅子舞の獅子と和尚は中国祭礼仮面の芸能といえる。

東南アジアの中華街では今でも旧暦の正月や元宵祭に獅子舞が行われる。そして、和尚に類したものが獅子の相手役として現れる。神戸の南京街で行われる獅子舞でも和尚の仮面を被った人物が獅子をじらしながら現れる（写真1）。このように獅子と和尚の芸能は中華世界でいまだに見ることが出来る。かつて中華文化圏であったベトナムでも沖縄でも獅子舞は行われている。沖縄では祭りは今でも旧暦に従って行われている。沖縄諸島では、旧暦8月15日のムラアシビに村の守り神としての獅子が現れ、

獅子舞が行われる。八重山諸島では旧暦の盆や、7月16日のイタシキバラに獅子が現れ、身寄りのない餓鬼を追ひ払うという。ただし、沖縄では獅子の相手をする仮面の和尚はいない。

沖縄ではミルクと呼ばれる和尚の仮面を被ったものが祭の行列に現れる⁵。ミルクは弥勒であり、その仮面は布袋を模しているといわれている。特に八重山諸島では、ミルクは“海の彼方の楽土から世（豊饒）を運んでくる五穀豊穡の神”と考えられていて、篤く信仰されているという⁶。東恩納寛淳は、ミロク（ミルク）は福州の元宵祭に現れる獅子舞の大頭和尚をそのまま輸入したものであると次のように述べている〔東恩納 1980 p 256〕。

ミロク踊りという豊年踊りは首里の赤田が本所で、それから各地方の農村の行事と発展したが、どこでも獅子舞と一緒にになっている。—中略— 福德円満の相をした大和尚の面を頭からすっぽり被り、黄色の法衣を着け、右手にアカザの杖を取り、左手に大きな団扇を持ち、ゆうゆうかんかんとして徐行する。これがミロクで、



写真 1：神戸南京町の獅子と“和尚”（右）

左手に団扇を持つのは、「左ウチワ」といって、安楽な身上の表現である。包搭児を持っていないだけが、布袋と異なっているが、これは福州の元宵祭の大頭和尚をそのまま輸入したもので、この踊のテーマ音楽がピーラルラーと称する唐楽である。

首里の伝承にも、首里の芸能である弥勒（ミルク）と獅子は「首里三殿内」から出ているといわれている⁷。もし東恩納の記したように、ミルクの芸能が中国の獅子舞に現れる和尚に由来するならば、当時の琉球の人々は、なぜ、和尚の仮面を被ったものをミルク（弥勒）と呼んだのだろうか。

ベトナムでも正月や中秋には獅子舞が行われる。以下は、ベトナムの中部フエにある「子供の家」⁸の代表・小山道夫氏からお聞きした中秋の獅子舞の様子である。

獅子舞はもちろん中国からの影響ではありますが、既にベトナムに定着しベトナム人の伝統行事となっています。正確にはわかりませんが、獅子舞は、北部と中部は「中秋」だけ、南部は「テトと中秋」に現れるようです。中秋は、ベトナム語でも TET TRUNG THU といいます。TET（テト）は正月だけでなく、季節の分かれ目の行事につく言葉のようですね。「子どもの家」でも中秋祭りをしますが、正面の看板には「TET TRUNG THU」と書いてあります。中秋のお祝いは、子どもたちのお祝いの日になっています。日本の5月5日か3月3日のようなものですね。フエでは子どもたちが獅子舞軍団を作り町中を練り歩き、各家庭を回り、地面の神様と獅子舞を披

露し、お金をもらう日でもあります。そんな事情もあり子どもたちが中心ですが、お金になることもあり、大人獅子舞軍団もあるようです。

獅子舞では必ず「地の神」が出てきます。地面の神様は、家の中に住み着いている悪霊を追い払う役割のようですね。地面の神様の伝説があるようです。地面の神様は一人が基本ですが、時には2人いるときもあるようです。獅子舞は家に幸福を呼び込むのだそうです。地面の神様が悪霊を追い出し、獅子舞が幸福を呼び込むという、地面の神様と獅子舞はセットになっているようです。お面はお店で売っています。獅子舞も売っています。地面の神様はおなかに布か紙などを入れて、太った「太鼓腹」になります。

ベトナムの獅子舞については、ベトナムの年中行事を扱った『TET THE VIET-NAMESE LUNAR NEW YEAR』（以下、『TET』と記す）や『東南アジアを知るシリーズベトナムの事典』にその概要が記されている。『TET』によると、龍舞いや獅子舞には笑顔の真ん丸い顔の大きな頭の僧が動物使いとして現れるという。彼は「地の神（Lord Earth）」であり、Ong Diaと呼ばれ、龍や獅子をあちこちから店や家の入口まで先導する役割だという。手には扇、あるいは緑の葉、はたき、玉、あるいは旗を持ち、片手で太鼓腹を叩くという〔HUU NGOC - BARBARA COHEN 1997 pp.68-69〕。

ベトナムのこのような事例は和尚の仮面をミルクと呼んで受容した沖縄の事例について考える場合、何かの示唆を含んでいるのではないだろうか。

2) 2006年の中秋の獅子舞：獅子とオン・ディア

2006年10月4日（旧暦の8月13日）、成田からホーチミン市を經由して、国内線に乗り継ぎフエに向った。フエはベトナム最後の王朝、グエン朝（1802～1945年）の都であり、フォン川のほとりには王宮、寺院、皇帝廟が点在し、その一群は世界遺産に登録されている。フエに到着したのは夜の8時近かった。空港からフエの市街まで30分以上かかるが、道中、さっそく獅子舞を見ることができた。車の中まで、喧騒の中に混じってタイコの音や笛の音が聞えてきて、道路沿いの至るところで獅子舞の人盛りが見られた。

ホテルについてから街のレストランで夕食をとっていると、テーブルの傍に獅子、オン・ディア、太鼓・笛を演奏する子供たちが集まり獅子舞を演じてくれた。みんな12～13歳前後の子供たちだ。「師」と書いてあるグンパイを持った布袋腹のオン・ディアは私たちの脇にやってきてグンパイで煽いでくれた（写真2）。10時頃まで、獅子舞のタイコの音がホテルの部屋まで聞えてきた。

翌朝、フエの市街を歩くと道端で獅子舞の頭やオン・ディアの仮面が売られていた。朝、学校にまで獅子舞の衣装を持っていく小学生の姿も見られる。カメラを向けると、獅子とオン・ディアがポーズをとってくれた（写真3）。フォン川の畔のドンハ市場に寄った。市場の入口には真っ赤な箱に入った月餅が積み上げられていた。ホイアンで知り合った英語を話す男性に獅子舞について次のようにお聞きした。

獅子舞を行う子供の年齢は15歳以下の

子供たちで、学校、地域などでグループを作る。女の子もグループにいるが、実際に獅子舞を行うのは男の子である。ご祝儀は10,000～20,000ドン（70円～140円）くらいだが、金額は演技の上手い下手、獅子の大きさや美しさによって異なる。しかし、獅子舞はお金を貰うことが問題ではなく、あくまでもゲームとして楽しむものだ。獅子舞の廻る道順は特に決まっていない。主に近所の商店街だ。獅子舞の行事が始まる前にお祈りなどすることはない。ただし、15日の夜、獅子舞が終わったら家の傍で仮面と衣装を燃やす。隅

にテーブルが出してあり、ノートやお菓子が山積みになっていた。2頭の獅子と2人のオン・ディア（スカートを穿いた男の子だった）によって賑やかに獅子舞が行われていた。隣の三階建ての建物の上から袋が吊るしてある。獅子は木の梯子に登って、梯子の上で舞い、最後にその袋を取って下りてきた（写真4）。このやり方は、10月1日に横浜中華街の国慶節でみた、商店をまわって上からつるされたお布施を貰う獅子舞とそっくりだった。獅子舞が終わった後、三人の役員が名前をチェックしながら、机の上に山積みになっていたノートやお菓子を子供たちに配っていた。この日は子供たちがプレゼントをもらえる日のようだ。



写真2：布袋腹のオン・ディア



写真3：ポーズをとる子供たち

その晩フエの大型書店に行くと、店の入口に大きな人盛りがあった。大規模な獅子舞が行われている。オン・ディアは青い着物にグンパイを持っていて、腹には何かを入れて膨らませ布袋腹にしている。獅子が店の高いところに吊るした袋を取ってきて獅子舞は終わった。獅子舞が終ると店の人は入口で子供たちにお菓子を配る。お菓子を配るのは店内でも続き、ドアのところで帰る客の子供たちにお菓子を手渡していた。

10月6日（旧暦8月15日）の夜、DMZツアーのあと、フエからハイヴァン峠を越えてホイアンに向った。途中の街でも人盛りができていて獅子舞が行われていた。都市以外ベトナムの夜は暗い。暗い中、車中まで獅子舞の賑わいが伝わってくる。獅子舞

の行われる混雑した狭い田舎道での運転には運転手さんも神経を使っていた。夜8時過ぎホイアンに着く。獅子舞とバイクの喧騒の中、ホイアンの街を歩く。セルロイド製のお面、電池で動くおもちゃが路頭で売られていた。大通りの銀行の前で大勢の人が集まっている。獅子が梯子に登って、銀行の屋上から吊るされた袋を取ろうとしている。屋上では人が棒の先に袋をつけて立っていた。道を歩くとさまざまな獅子舞のグループに出会う。青年たちの獅子舞の規模は大きいし、人数も多い。7～8歳くらいの子供たち数人の獅子舞は元気がいい。5歳くらいの子供までが、店先で一人で小さなタイコを叩いて練習をしていた。3日間、賑やかに続いた獅子舞も翌日（旧暦16日）の夜にはほとんど姿を消した。



写真4：梯子に登る獅子

3) 中秋と獅子舞

末成道男によると、陰暦8月15日の中秋はお月見程度の子供を中心とした行事であるという。村は一切関与せず、子供のいる家庭で、お菓子などを準備したところに子供たちが集まって月見をする程度だったという。そして、獅子舞はむしろ春祭りに龍舞と共に行われたという〔末成1998 p209・p224〕。高岡弘幸は、「中秋節は旧来の酒を飲みながら月を見るという風流な祭りから、現代的な子供の節句に変化している」〔桜井桃木編1999 p327〕という。中秋節、Tet Trung Thuが「こどもの日」として祝われるようになったのは、比較的最近であるようだ。

ここで注意しなければならないのは、中秋はあくまでも旧暦8月15日であり、実は

その二日前、旧暦8月13日にはむらの守護神の秋祭りが行われるということである。ハノイ近郊の村のチュウフック（潮曲）では、秋祭りには子供たちの龍舞、獅子舞が行われ賑わいをみせるという〔末成 1998 p 208〕。現在の子供たちの獅子舞は、8月13日～8月15日にかけて行われているが、これは秋祭りの獅子舞が中秋まで続けて行われるようになったためではないかとも考えられる。

『TET』によると、Tet Trung Thuの祭では子供たちが大きな口の虎のような仮面を被るという。これは、次のような神話によるという。「怪物の巨大な歯が満月の一部を齧ってしまい、月食を引き起こしてしまったが、怪物は仮面を付け虎ようになった子供たちにおそれをなして逃げていってしまう」という神話である。仮面を被った子供たちは、タイコを叩いて、歌い、叫びながら新しいおもちゃや灯籠を持って楽しそうに道路をパレードするという〔HUU NGOC BARBARA COHEN 1997 p 75〕。このような子供たちの仮面の行列が現在行われている「獅子とオン・ディア」を受け入れた土壌と考えられなくもない。

ベトナムにおける獅子舞の受容は決して中国南部の「獅子と和尚の芸能」だけではない。それ以前から、獅子舞は行われていたに違いない。ただ、現在の「獅子と和尚」の形の獅子舞はやはり南方中国の漢民族の影響であろう。

ここでは、獅子舞に現れる和尚はなぜオン・ディアと呼ばれるかを考えたい。「地面の神」オン・ディアとはどのような神さまなのだろうか。実はオン・ディアは福神と

して商店の入口に鎮座している神でもあり、いたるところで目に留まる神さまなのである。

2. ベトナムの信仰習俗

ベトナムの民俗宗教についての従来の研究には、末成道男の「北部ベトナムの土地神」及び『ベトナムの祖先祭祀』、桜井由躬雄、桃木至朗編『東南アジアを知るシリーズ ベトナムの事典』（以下、『ベトナムの事典』と記す）の宗教編等があるので参照にする。

ベトナムの主な宗教には、仏教・キリスト教、新興宗教のカオダイ教やホアハオ教、少数民族のアニミズムや上座仏教、イスラームなどがある。しかしその実態は、大乘仏教、道教、儒教の三教が、祖先崇拜・アニミズム・各種の占いなどと融合した現世利益を追求する民間信仰の信者であると大西和彦はいう〔桜井 桃木編1999 p 29〕。

1) 家の中の神さま⁹

フエ、ホイアン、ハノイの商店街の事例を記す。家の中には壁や棚（扉のない箱型である）に祖先や観音等を祀る祭壇があり、赤い額、香炉、燭台、花瓶、写真等が置かれている。ベトナムでは、いたるところに神さまに供された香炉が目につく。いいかえれば、香炉のあるところは神さまのいらっしゃる場所、あるいは神さまに通じている場所なのだろう。

壁の上段に観音像が、下に家族の遺影が飾ってある家もあった。壁につけられた棚の中央には「五祀家堂」と掛かれた赤紙が置かれていて（あるいは箱に貼ってある）、

果物、花、コップ、電気の燭台などが供えてあった。電気で飾られた棚もあった（写真5）。脇にはホー・チ・ミンの写真や観音の絵が掛けられていたりする家もあった（写真6）。どの商店の入口にもこのような棚が壁に付けられていた。この棚は「バーントゥー」とよばれるという。

ある商店には聖母の像とキリストの絵が入った棚が壁に掛けてあった。まわりは電気で綺麗に飾られていた。訊ねたら、この店の主人はカトリックだという（写真7）。商店の床には扉のない箱が置かれていて、その中にニコニコ顔のふたりの神様が入っている（写真8）。一人は白い顎鬚の神さま、もう一人は出っ腹で頭巾（帽子？）を被り

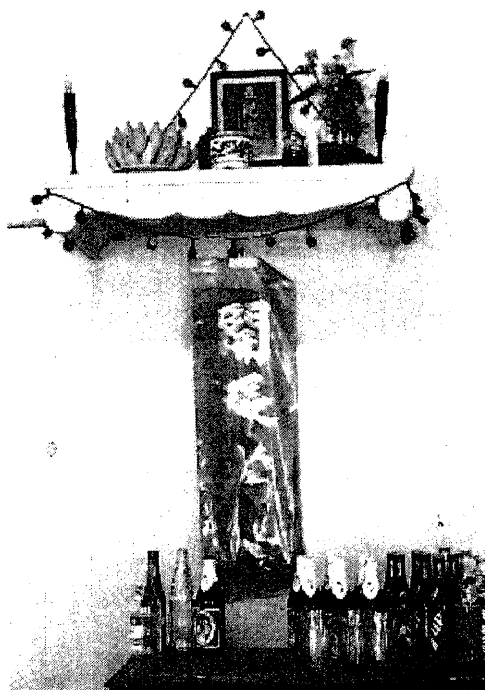


写真5：赤い額（棚の上）、香炉、燭台等

片手にグンパイを持った神さまだ。商店の方に神様の名前を尋ねて、ベトナム語で神さまの名前を書いてもらう。箱の中の神さまは、Tho DiaとThan Taiだという。Tho DiaはThe Land of Ghost, Than Taiは The Lucky Ghostだという¹⁰。つまり、Tho Diaは「地の

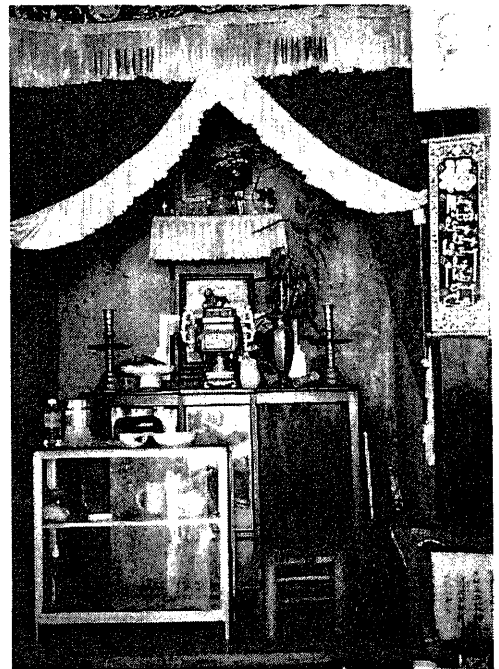


写真6：ホー・チ・ミンの写真と香炉など



写真7：商店の聖母の像とキリストの絵

神」, Than Taiは「財神」だ。さらに, Tho DiaはOng Diaともいわれる。ハノイでは, 箱の中の神様はThan TayとOng Diaだといわれた。Ong は爺の意味があり, Ong Diaは「土地爺」とでもいう意味だろうか。ここでは, Tho DiaあるいはOng Diaを「地の神」, Than Taiを「財神」と記す。前述したが, 「地の神」のOng Diaは獅子舞にも現れる。つまり, 商店に置かれた箱の中に飾られている出っ腹で頭巾を被り片手にグンパイを持った神さまは, 獅子舞に現れるグンパイを持った布袋腹の仮面の神さまと同じく「地の神」, オン・ディアと看做されているのだ。

箱の中の2神は右が「財神」で左が「地の神」であったり, またその逆であったり一定していない(本来は決まっているのだろうが)。神さまの真ん中, つまり箱の中央には香炉が置かれ, 燃え尽きた線香が何本も挿してある。供物としては, ふたつの茶碗, 菊やバラの花, 一番手前に果物(巨大

な柑橘類やドラゴンフルーツ, スイカなど見ばえのするもの)が置かれている。果物と共にタバコが供えられていることもあった。香炉の奥には赤い神が貼ってある。ベトナム語の表記は, 現在, アルファベットが使用されているが, 以前は漢字が使用されていた。今でも神さまに使われる文字は漢字だ。赤い紙には, 「聚寶堂 大抬財 吉進□ 金板初發葉, 五方五土龍神, 前後地主財神, 銀樹正開花, 先□先友之神位」と漢字が書いてある。福建省出身の蔡文高先生によると, この「五方五土龍神」云々の文字は福建省の沿岸部で見かけるといふ。

「地の神」と「財神」の入った箱の上, あるいは箱の脇には, 陶製の派手な色彩の布袋が大きな笑みを浮かべて座っている(写真9)。布袋はOng Phatという。ほとんどの商店が床にこのような箱を置いていて, そのそばにOng Phatを飾っている。Ong PhatのPhatの意味はブツだから, この布袋はブツ爺という訳になる。キンピカの餃子型の金を表わしたものを持っていて, そこには「生意興隆」と書いてある。帽子を被り布袋腹でグンパイを持った笑顔のオン・ディアは布袋に似ているが布袋ではない。オン・ディアと布袋は別のものであるという意識がベトナム人にはある。

南中国の寺院では, しばしば寺院の入口の天王殿に布袋像が安置されている。これらの布袋像は弥勒菩薩の化身と考えられていて中国では大肚弥勒と呼ばれている。蔡高文先生によると, 福建省とその付近の省では, このような弥勒のことを軽い口調で「大肚(子)和尚」と呼ぶことがあるという。ベトナムの寺院でもこのような大肚弥勒を



写真8：箱の中の「地の神」(左)と「財神」(右)

見ることが出来る。ダナン近隣の五行山の入口には中庭と本堂の両方に布袋の像があった（写真10）。商家の入口の、「財神」と「地の神」を祀る箱（バーントゥー）の傍に置かれる派手な彩色布袋像はオン・パットと呼ばれる。人々は、寺院に置かれる布袋（大肚弥勒）と、商家の入口に置かれる福神としての布袋像（オン・パット）を祀り分けていることがわかる。

ホイアンの旧市街地にある陳氏の祠堂の家具には、八仙や福祿寿の絵が描かれていた。陳祠堂は19世紀初頭の官吏の祠堂¹¹である。19世紀初頭のベトナムでは、これら中国の福神が知られていたことがわかる。しかし現在、ベトナムの家庭にある暦の絵（写真11）には、福神のメンバーの一員としてオン・ディアが中央に一番大きく描かれて

ている。

2) 家の周辺の神さま

家の周辺にも神さまはいっぱいいる。線香が沢山さしてある香炉がその目印になる。大木には必ずといっていいほど、香炉の置かれた箱がかかっていたり（写真12）、樹木に線香が差し込んであったり、花が添えられていたりする。また、大木の根元に線香と花が置かれていたりする。ホイアンの陳祠堂では、エナを祖堂の裏庭の木の根元に埋めたという。フエからハイヴァン峠に向かう漁村では、道路沿いに柱が立てられ、その上に小さな箱型の祠があった。中には香炉と紅白の二頭の馬の人形が置かれていた。



写真9：箱の上の布袋（オン・パット）



写真10：ダナン近隣の五行山の大肚弥勒

3) 地域の神さま

ホイアンで早朝、「春林邑」と書かれた建物に管理人のような老人に入れていただいた。建物中央の壁には「神」と大きく墨書されている。末成によると、集落毎に「館(quan)」という宗教施設があり、集落の土地神は館の奥の壁に“神”という字が書かれた前に香炉と燭台を置いた祭壇で祀られているという〔末成 2000 p66〕。この「春林邑」は集落の土地神を祀る「館」であろう(写真13)。

末成によると、ベトナムの土地神は多くの場合象徴するものなしに礼拝され、「神」という文字は土地神の数少ない具象化した形態であるという〔末成 2000 pp.70 -78〕。「神」と墨書された部屋を中心にふたつの部屋があり、右の部屋の正面の壁には「蔭靈(?)」、左の部屋には「前性(?)」と墨書



写真12：木にかかっている香炉の箱

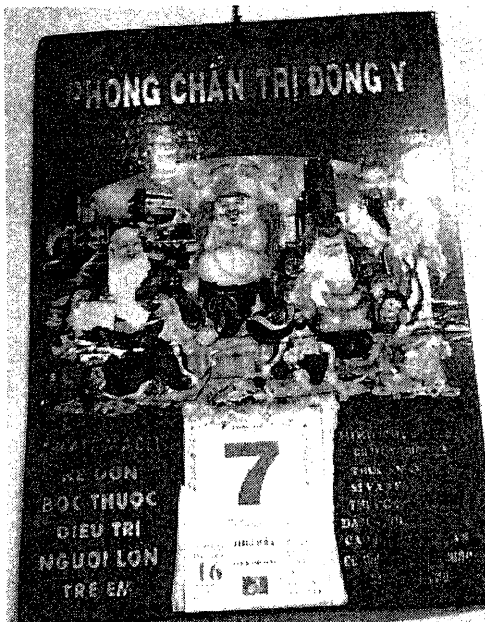


写真11：暦の絵、中央がオン・ディア

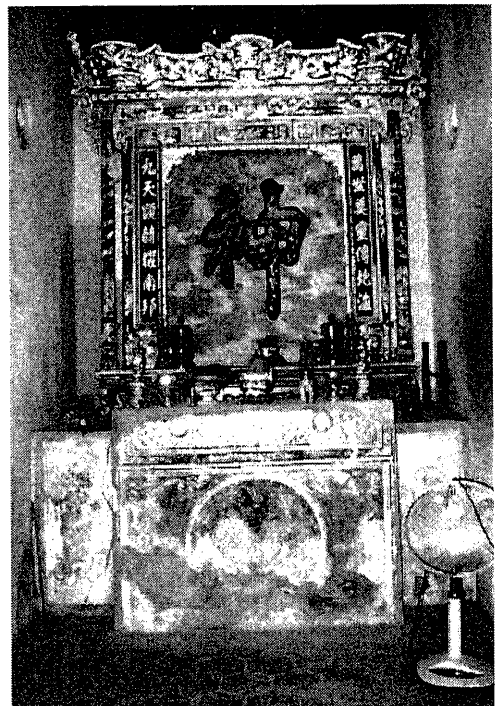


写真13：「春林邑」

されていた。そして、どの部屋の祭壇にも香炉と燭台、花瓶が置かれていた。また、さまざまな扁額、聯が掲げられていた。「神」と墨書された両側には、「丙成年元旦 徳大安民千古盛」「功高五穀萬年長」「萬世□大靈傳此海」「九天顯赫耀南邦」と書いてあった。「前性(?)」と書かれた部屋には、簡単な炊事道具、瓶、飲み水などがあつた。天井に写真や賞状が掲げられていて、地域の公共施設でもあるということがわかる。

沖縄の御嶽にも具体的な神様の像のはないが、八重山諸島では拝殿の香炉の並ぶ祭壇の上には扁額が、その左右には「神靈照萬年」「徳澤垂千載」¹²などと墨書された聯が掲げられている。御嶽はモリ全体が神域で、拝殿は簡素な建物に過ぎない。集落の宗教施設の意外な共通性にびっくりする。

ところが、具体的な神像のないはずの「館」の中に、「神」脇の「前性(?)」と書かれた部屋には、古いオン・ディアの像が並んでいた。像には虎のような動物が巻き付いていた。これらのオン・ディアの像は、商店の店先にみられる箱に入って綺麗に彩色された像ではなくて、もっと素朴な像だった(写真14)。

4) 町中をさ迷う霊

町中をさ迷う霊がいる。10月5日(旧暦8月14日)商店街を歩いていて、夜になると道路に供物が置かれているのに気がついた。店先の道路に低いテーブルが出され、その上には紙で作った服、果物、花、紅白の細かい玉(あられのように見える)のようなもの、お粥の入った碗などが置かれている(写真15)。見ていると、テーブルの前

で線香を持って祈り、次に紙を道端で燃やして、そこに紅白の小さな玉を撒き、碗の中のお粥を撒く。暗くなった通りで紙を燃やす炎だけが明るい(写真16)。

同じようなテーブルが他の商店の前にも

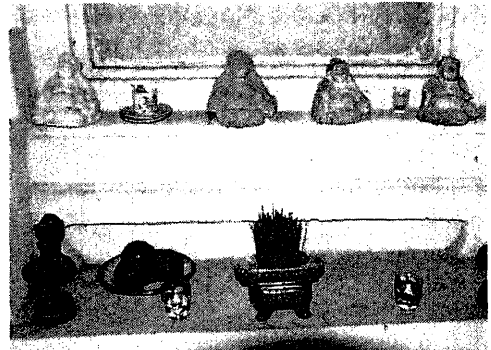


写真14:「春林邑」にあったオン・ディアの像

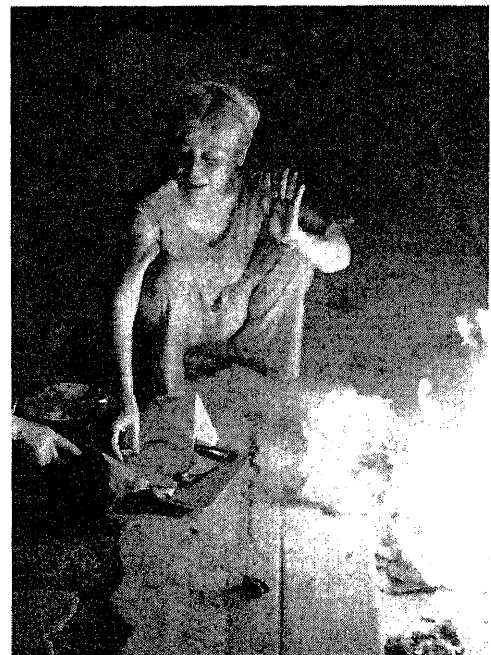


写真15:紙の服を燃やす

並んでいた。店の人にテーブルの供え物を指し、英語で何かと訊ねたが通じない。傍で見ていた女性が片言の英語で次のように説明してくれる。毎月旧暦の14日は霊の為に、果物やお粥を上げる日だという。しかし、ある人は祖先に対する供物だという。翌日の旧暦15日の夜、ホイアンの道端でも、昨晚と同じように歩道の端に低いテーブルが出され供物が供えられていた。女性が紙の服を焼きお粥を地面に撒いていた。

5) お札と呪符

10月5日(旧暦8月14日)、旅行社の準備したベンツに乗って、フエの田舎道を走ってグエン王朝の歴代の皇帝廟を巡った。運転席には美人の観音像が置いてあり、さらに観音様のお札が下がっていた。何かと尋ねると、「カンアン」だという。交通安全のためのお札なのだろう。

翌日は、ハイヴァン峠を越えてダナンを経てホイアンに抜けた。この日の運転席の天井には、呪符がセロテープでしっかりと止めてあった(写真17)。これも交通安全のためのお札なのだろう。このような呪符は中国を起源とし、日本、沖縄でも報告され

ている。

6) 中華世界の民俗

車の中のお札もそうだったが、沖縄と似た中国起源のベトナムの民俗はいたるところで目につく。フエの郊外の村を訪れた時のことだ。家の門の入口に、直進して入れないようにコンクリートの壁が立てられているのが目についた。沖縄のヒンプンと同じだ。山の斜面に墓地が点在する。途中で止まってもらい墓地を見せてもらおうと、亀甲墓を思わせるつくりの墓地だった(写真18)。

世界遺産となったホイアンの町は建築・



写真17：車の天井に貼られたお守り



写真16：外のテーブルに並んだ供物



写真18 亀甲墓を思わせるつくりの墓

改修ラッシュだ。巨大な孔子廟は改修中だった。孔子廟の手前のキリスト教会も新しくピンク色に色が塗られていた。ホイアンは16世紀、交易で栄えた港町だ。かつては交易にたずさわる日本人や琉球の人々も住み、日本人街も作られていた。

今でも旧市外に日本人によって架けられた橋がある。橋の名前は「来遠橋」といい、1593年に日本人によって掛けられた屋根付きの橋である（写真19）。橋の両側には犬と猿の像が祀られている。橋の中央には小さな寺院がついている。その後、修復が行なわれ、寄付をした中国人の出身地別グループの長の名前が刻まれた石が建っていた。金額はさほど差がないのだが、福建省出身の人々の寄付金が一番多かった。このように廟と橋が合体した橋は実は中国にもあり、今年の元宵祭に福州を訪れたときにやはり橋の上に廟のある橋を渡った。その橋は、福州の閩江の対岸にある義序という町の旧市外を流れる川に架かっていた。ホイアンには福建省出身者が多いが、中国には橋の上に廟を作る習慣、あるいは信仰があったのではないだろうか。

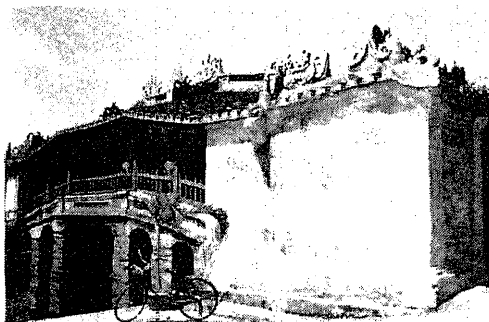


写真19：「来遠橋」の外観

3. まとめとして

ベトナムが中国文化の影響、しかもきわめて中国南方の文化の影響を強く受けていることがわかる。これは、千年間の中国支配の時代に伝えられたもの、その後、中国から移住した人々によって伝えられたもの、サイゴンに住む中国人によって行われていたが後にベトナム一帯に流行したものなどの、重層的な中国文化の影響と考えられる。ベトナムと琉球の文化が似通っているのに驚かされたが、南方中華世界の周辺としてのベトナムと琉球と考えれば、それは当たり前のことなのかもしれない。

今回見た中秋のベトナムの獅子舞「獅子とオン・ディア」も、その芸態から、中国の「獅子と和尚」の芸能を受容したものと考えられる。では、中国の獅子舞においてグンパイをもった布袋腹の和尚にあたるオン・ディアはどのような神なのだろうか。今までみたオン・ディアの登場場所によってオン・ディアを分類すると、

- ① 獅子舞に現れる仮面のオン・ディア
- ② 商店の床に置かれた箱の中に、「財神」と共に置かれたオン・ディア
- ③ 集落の宗教施設「館」に置かれたオン・ディア
- ④ 暦の絵に、他の神々と共にグループの一員として描かれるオン・ディア

の四種類に分けられる。以上のことから、「地の神」あるいは「土地の神」と呼ばれるオン・ディアのさまざまな性格がわかる。

現在、オン・ディアは、商家に「財神」とセットの箱で祀られているが(②)、箱の中の赤い紙に書かれた文字は蔡高文先生に

よると、福建省ではよく見かけるものだという。また、箱に入ったオン・ディアと「財神」のセットもベトナム南部の漢民族の影響を受けたもので、比較的新しいものではないかといわれる〔末成 2000 p.71〕。このことから、商家のオン・ディア像は新しく漢民族の影響下に作られたことが考えられる。つまり、以前からオン・ディアの信仰があったところに、財神とセットとしての新しいオン・ディア像が造られたのであろう。箱の中のオン・ディアは、大黒のような頭巾を被ってグンパイを持っている布袋腹の笑顔の神様だ。集落の宗教施設「館」にもオン・ディアが置かれているが(③)、これは頭巾姿で虎のような動物を腰に巻きつけている。

①の獅子舞に現れるオン・ディアは、グンパイをもった笑顔の布袋腹であり、中華街の獅子舞に現れる和尚そっくりである。獅子舞のオン・ディアはグンパイを持って布袋腹のところは似ているが、②③④の頭巾姿のオン・ディア像とは異なっている。ベトナムにおいて獅子と和尚の現れる獅子舞を受容したとき、すでにベトナムでは「地の神」、オン・ディアにたいする信仰が流布していて、人びとはグンパイを持った獅子舞の和尚もオン・ディアと呼んだのではないだろうか。これは、琉球において「獅子と和尚」の芸能が受容されたと仮定した場合、獅子舞に現れる和尚をミルクと呼んだことと同じ構造なのではないだろうか。

獅子と和尚の芸能を受容したとき、すでに琉球ではミルク（ミロク）の信仰が流布していた。そのため、人びとは和尚の仮面をミルクと呼んで崇拝した。そして、ミル

クは獅子舞につきものの仮面の神ではなく、行列して住民の健康を祈る神、あるいは舞台に現れるミルクの芸能として発展していったのではないだろうか¹³（写真20）。琉球におけるミロクの芸能は、やはりアジアに流布していた民間信仰としてのミロク信仰とのかかわりの中で見ていかなければならない。

【付記】この報告を書くにあたっては、神奈川大学大学院の蔡文高先生にさまざまな助言を頂いた。此处に記して感謝の意を表わしたい。

参考文献

・日本語

末成道男 2000年「北部ベトナムの土地神
華南漢族との比較」『ベトナムの社会と
文化』第2号 ベトナム社会文化研究
会編 風響社

桜井由躬雄 桃木至朗編 1999年『東南ア
ジアを知るシリーズ ベトナムの事典』
角川書店

沖縄大百科事典刊行事務局 1983年『沖縄
大百科事典』沖縄タイムス社



写真20：グンパイを振る首里赤田のミルク

永尾龍造 1971年『支那民俗誌』東方文化書局（台湾）

中村喬 1988年『中国の年中行事』平凡社
那覇市企画部市史編集室 1979年『那覇市史 資料編 第2巻中の7 那覇の民俗』那覇市企画部市史編集室

東恩納寛惇 1980年『東恩納寛惇全集8』第一書房

・中国語

顧朴光 1996年『中国面具史』貴州民族出版社

万建中・周耀明 2004年『漢族風俗史（清代後期・民国漢族風俗）第五巻』学林出版社

中国民族民間舞踊集成編集部 1992年『中国民族民間舞踊集成』新華書店

周耀明 2004年『漢族風俗史（明代・清代前期漢族風俗）第四巻』学林出版社

・英語

HUU NGOC BARBARA COHEN 1997
『TET THE VIETNAMESE LUNAR NEW YEAR』THE GIOI PUBLISHERS

注

¹ 本論では、いちおう明治以前を琉球、明治以降を沖縄と呼び分ける

² 中国では、正月十五日を「上元節」と称し、その夜を「元宵」と呼んで、灯籠まつりが行なわれた。中村喬の『中国の年中行事』によると、「それは、数日にわたる盛大なもので、家々の門前や道路には、紅幕や趣向を凝らした色鮮やかな灯籠が飾られ、街には竜や獅子などの形をした「行灯」と称する灯籠が練り歩く。この夜ばかりは古来

夜行が許され、灯籠見物の人々で賑わった」〔中村 1988 p17〕という。

³ 『漢族風俗史（明代・清代前期漢族風俗）第四巻』〔周耀明 2004 pp.118-119 pp.164-119 p.308〕『漢族風俗史（清代後期・民国漢族風俗）第五巻』〔万建中・周耀明 2004 p77〕

⁴ 以下の資料は主に『中国民族民間舞踊集成』による。

⁵ 本論では沖縄の人々の呼称であるミルクを用いるが、筆者が必要と判断した場合は、弥勒、ミロクと使い分ける。

⁶ 『沖縄大百科事典』による。

⁷ 『那覇市史 那覇の民俗』〔那覇市企画部市史編集室 1979 pp.699～700〕。

⁸ 「子供の家」はストリートチルドレンの自立支援活動を行うための施設であり、ベトナムのストリートチルドレンの存在に心を痛めた小山道夫氏によって1994年に創設された。

⁹ なお今回は残念なことに、台所の竈神を見ることができなかった。竈神は沖縄でも各家庭に必ず祀られている家の神であるが、ベトナムでも家の神として信仰されているという。竈神についての調査は今後の課題である。

¹⁰ 末成道男によると、Tho Diaは屋敷のある土地を管轄している土地神だという〔末成 2000 p63〕。

¹¹ 先祖を祀る建物兼住居のこと。

¹² これは八重山諸島石垣島大浜の崎原御嶽の祭壇に掛かる聯の文句である。

¹³ もしミルクが「獅子と和尚」の芸能として受容されたものとしたら、なぜ、琉球ではミルクと獅子の芸能が別々の芸能になっ

たのかという問題が出てくる。これは、獅子
子が風水と結びついて既に琉球では受容さ

れていたため、獅子とミルクは別々の神と
して祀られていったとも考えられる。

新刊紹介

ベトナム社会科学院・漢喃研究院 『字典チュノム』

日本で「漢字文化圏」というと、広く考えれば琉球・北朝鮮・台湾・香港もリストに入るかもしれないが、たいていの場合「日中韓」の東アジア地域のイメージが強い。東南アジアへの影響が無視される傾向があるといえるだろう。そして、ベトナムもまた「漢字文化圏」の一員であったことは忘れられがちである。ベトナムでは、華僑文化のみならず、地域全体に中国文化の影響が明確に見て取れる。「インドシナ」という呼称は21世紀には相応しくないが、現在のベトナム文化における中国の貢献を否定することはできない。ベトナムは1000年もの間中国に支配されていた。イギリスがノルマンに支配された時期と同様、この頃には既にあった文化に中国文化が滲み込み、エリート文化層を作り上げた。中国文化からの一番大きな遺贈は漢字 (han tu・ハントウ) である。現在ベトナムは、後のフランス支配の影響によりローマ字を使用しているが、ベトナム語の表記にはそもそも漢字が使用されていた。日本と同様、特にエリートの間や専門用語には漢語がよく現れ、ベトナム語の学習においても漢字の知識はかなり有利となる。「越南 (Vietnam)」という国名が中国語に由来することは、最も有名な例である。そのため、中国からの独立をついに達成しても、越民族は漢字を棄てることができなかったのである。しかし、中国の手綱から解放されたベトナムの文化人は、ベトナム語により合うように漢字を工夫し、数世紀後には chu nom (チュノム・いわゆる「ベトナム漢字」) を作り上げた。現在残っている記録で最も古いものは13世紀の寺で見つかったものとされている。

16世紀になるとポルトガルの語学に精通した宣教師たちがベトナムに到着し、宗教活動のため、ベトナム語のローマ字化を試みた。次いで、フランスの宣教師、そして植民地支配者がこれを利用し、このローマ字は「クオック・グー (國語)」として定着した。1920年にチュノムの使用は禁止され、現在では使用できる人はほとんどいない (数十人の知識人・僧侶と中国の京族という少

数民族一越民族の別名一を除いて) ため、チュノムの学習自体がベトナム語の習得や練習という目的において有効であるかははなはだ疑問である。日本語話者がベトナム語を勉強するには普通の教科書と越日越辞典でこと足りるといえよう。しかし中国の諸言語・日本語・韓国語の比較をする場合にチュノム辞典は欠かすことはできない。また、チュノム辞典自体も非常に興味深い文献であるといえよう。ベトナム社会科学院の漢喃研究院が編纂した『字典チュノム』は其中でも最も使いやすいものである。より手ごろな字典はローマ字・チュノムのみであるが、この字典はその他に部首別で調べる事ができる。また、日本語はないが、英語による解説があることで、ベトナム語がわからない人でも利用しやすい。ベトナム語がローマ字化したことで、国際的な視点からみれば便利になったと言えるかもしれないが、チュノムが使用されなくなったことは、ある意味では非常に残念なこともある。この「漢字であるが、漢字でない」独特の表記システムは大変興味深く、ベトナム語と他の漢字文化の言葉の発音比較といった点からも参考になるだろう。現在のところ発行部数1000部だけの『字典チュノム』は大変貴重な資料である。ちなみに、この解説の中には竹内与之助著の『字喃字典』(大学書林1988) についても言及されている。

Nguyễn Quang Hồng (Viên Nghiên Cưu Hán-Nôm, Viện Khoa Học Xã Hội Việt Nam (ベトナム社会科学院・漢喃研究院)) (編) 『Tù Diển Chu Nôm (字典チュノム)』 (Nhà Xuất Bản Giáo Dục (教育出版社), Thanh Hóa (清化市), 2006年)

Nguyễn Quang Hong (Viên Nghiên Cưu Hán-Nôm, Viện Khoa Học Xã Hội Việt Nam (ベトナム社会科学院・漢喃研究院)) (編) 『Tu Dien Chu Nom (字典チュノム)』 (Nhà Xuất Bản Giáo Dục (教育出版社), Thanh Hoa (清化市), 2006年)

(サイモン・ジョン)